Schwartz 1985まとめ

使用データ：HSB(High school and beyond)

手法：生涯の効用最大化問題を解いてるモデル

theoretical model

* 大学進学の意思決定は最終的には学生が行うが、家計全体の効用最大化担っている
* 単純のため「大学進学」と「それ以外」で分析
* 生涯benefitとcostの期待値は更新しない
* 親世代の年収が意思決定に絡むのは大学に通っている間だけ（ここ突っ込みどころでは？なんか誰の意思決定なのかよくわかんない）
* 大学に行くdirectなコストは「tuition + materials + fees – grants - loan」
* loanは10年間で返さないといけない

empirical model and data, results

* least cost college、すなわち最も近くにある大学に進学する事を仮定している（これによりendogeneityを確保）→いやダメでしょ
* 多くの生徒の奨学金は0に張り付いているのでTorbitを使う
* future return variableはstandardな変数に回帰して推定
* 調査時点で大学進学の意思決定がなされているかに注意
* 大学進学確率の推定にロジットを使う→public grantが優位に正。他は優位じゃない
* 親の所得が正の相関